

イタリア映画界の異端児

アゴスティの世界

快楽の園 | ふたつめの影 | カーネーションの卵 | 人間大砲 | 天の高みへ
クワルティエーレ愛の渦 | シルヴァーノ・アゴスティ 見えないものを見る人

ふたつめの影

La seconda ombra



精神医療の先進国イタリアの伝説的精神科医フランコ・バザーリアが、1961年に北イタリアの町ゴリツィアで感じた苦悩と大いなる改革。この分野では後進国と言われる日本での上映が大きな意義を持つことは間違いない。

「心の病はあらゆる病気と同じように尊重されるべきだ。心を病んでいても人間なんだ」
—バザーリア

「医師も看護師も 治療だと言ってわしを虐待していた… わしは自分のふたつめの影に逃げ込んだんだ。すると何も感じなくなった」
—劇中のセリフより

東京で好評を博した回顧映画祭が、ついに松山へ！

2/4 **土** ~ 17 **金** 松山 シネマルナティック

めくるめく映像美で数多くの巨匠に愛されるシルヴァーノ・アゴスティ
代表作6本 + アゴスティ入門ドキュメンタリーを松山初上映！



□主催 / 松山アゴスティ映画祭実行委員会

□上映協力 / 大阪ドーナッツクラブ シネマルナティック

A 快樂の園

(※Aプロは2作品同時上映です)
Il giardino delle delizie



医師カルロは、彼女のカルラが妊娠を受けて、しぶしぶ結婚。ところが、新婚旅行先のホテルで早くもすれ違うふたり。フラストレーション渦巻く彼の脳内では過去と未来が交錯し、妖しい女も忍び寄る。公開当時は法的に離婚ができなかったイタリア。本作はカトリック色の濃厚な公権力から検閲され、20分程度カットされたうえ、さらにR18指定となった。ラング、ルノワール、ベルイマンなど巨匠も絶賛。現代にもそのまま通じるテーマを突きつけるデビュー作。モリコーネの異色なロックサウンドは必聴。

●1967年 ●イタリア ●モノクロ・74分 ●監督・脚本/シルヴァーノ・アゴ스티
●音楽/エンニオ・モリコーネ ●キャスト/モリス・ロネ、イヴリン・スチュワート

A シルヴァーノ・アゴ스티見えないものを見る人 Il senso del mistero



制作した映像作品は、ドキュメンタリーや実験映画を中心に、なんと長短あわせて600本以上。イタリアを代表する記録映画作家ブルナット(1935-2010)によるアゴ스티の人物記。代表作の予告編的な映像、自宅や映画館での生活、制作の裏側が垣間見ると同時に、彼の人生哲学も明らかになる。

作中に登場するパピオ・ヴォーロは、イタリアでは知らない人などいないほど今をときめく作家・ラジオDJ・俳優で、その才能を発掘したのが、他ならぬアゴ스티である。

●2003年 ●イタリア ●カラー・30分 ●監督/パオロ・ブルナット

C クワルティエーレ 愛の渦 Quartiere



ローマ市内、監督の住むヴァチカン市国にほど近い界限で展開する4つの物語。クワルティエーレとは、「地区」や「エリア」を意味する。若年期、青年期、壮年期、老年期という人生の4つの段階。それぞれの物語が、冬・秋・夏・春の順に季節に対応する。共通するのは、孤独であり、誰かから、あるいは何かからの「不在」。

クローズアップを多用した独特の映像美と想像力を駆使して、「はみ出し者たちが生きた愛の現実を情感たっぷりに描く。「人間らしく生きていない」ことを自覚していない人たちに捧げられている。すべてが実話なのに、すべてがファンタジック。モリコーネによるサントラは、彼のベストスコアに挙げる声も多い。

●1987年 ●イタリア ●カラー・81分 ●監督・脚本/シルヴァーノ・アゴ스티 ●音楽/エンニオ・モリコーネ

E カーネーションの卵 Uova di garofano



第2次大戦末期。ローマから北へ敗走しつつも未だ北部で勢力を維持するドイツ軍とファシスト。抵抗するパルチザン。北上を続ける連合軍。内戦に近い激動の時代に幼少期を過ごしたアゴ스티が、子供たちの無垢ながら聡明な視点を通して活写した自伝的作品。大人になった少年の長いフラッシュバックとして物語が展開。戦時中、生きてくても生きられなかった子供たちに捧げられている。フェリーニやベルトルッチも絶賛した代表作。

●1991年 ●イタリア ●カラー・103分 ●監督・脚本/シルヴァーノ・アゴ스티 ●音楽/ダニエレ・レヤコ ●特別協力/アンドレイ・タルコフスキー

『人生は病院外にあり!』トークショー 2/4(土)16:30~17:30

『精神病院を捨てたイタリア 捨てない日本』などの著者であり、ジャーナリスト大熊一夫さんにお話をうかがいます。大熊一夫:1970年、アルコール依存症を装って精神病院に潜入入院し、『ルポ・精神病棟』を朝日新聞社会面に連載。鉄格子の内側で日常的に行われていた入院患者虐待を白日のもとにさらし、日本の精神医療改革に一石を投じた。現在は精神科病院廃絶に向けて活動を行っている。2008年、イタリア精神保健改革の父といわれる精神科医フランコ・バザーリアの名を冠したフランコ・バザーリア学術賞(第1回)を受賞。 ※『ふたつめの影』または、『人生、ここにあり!』当日半券で入場可

□開催期間

2月4日(土)~17日(金)

□料金

一般1700円 大学生1400円
シニア・高校生以下1000円(各回入替制)
回数券(4回)5000円(劇場のみで販売)
その他各種割引あり
(劇場ウェブサイトでご確認ください)

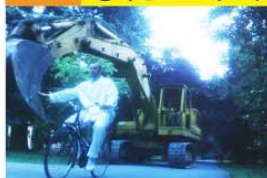
□上映会場

シネマルナティック
〒790-0012
愛媛県松山市湊町3-1-9
マツゲキビル2F
Tela/Fax:089-933-9240

(P) [駐車場] 付近の有料駐車場をご利用ください(提携駐車場はございません。)

B ふたつめの影

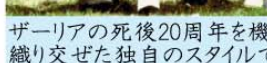
La seconda ombra



1961年、北イタリアの県立精神病院。用務員が洗濯物を回収しながら、施設内の暴力的な現状をひそかに観察している。実は彼は新しく赴任する院長であった。後日改めて颯爽と登場した彼は、職員たちを集めて病院を本質的に改変する意志を表明。拘束服、電気ショック、冷水シャワーなど、それまで平然と行われていた「医療行為」は、即刻排除。閉ざされていた精神病院の扉を開け放ってしまうなど、それまでは考えられなかったアイデアを次々と実行に移していったのだが…。



本作は、精神医療の先進国イタリアの伝説的精神科医、フランコ・バザーリア(1924-1980)に捧げられている。彼が現場で感じた苦悩と喜び。その成果としての大なる改革。患者たちと一緒に挑んだ精神病院制度の解体。バザーリアと緒からぬ縁があり、精神医療についてのドキュメンタリーを若い頃から撮り続けてきたアゴ스티が、バザーリアの死後20周年を機に、詩的で表現的な映像とドキュメンタリータッチを織り交せた独自のスタイルで劇映画化。



精神医療後進国と言われて久しい日本での上映が既に反響を呼ぶ一方、「新しい発想を持つこともさることながら、古い観念を乗り越えるほうがより難しいかもしれない」という普遍的な捉え方もできる作品だ。

●2000年 ●イタリア ●カラー・84分 ●監督・原案・脚本・撮影・編集/シルヴァーノ・アゴ스티 ●音楽/ニコラ・ピオヴァーニ ●キャスト/レーモ・ジローネ、旧精神病院入院患者およそ200名

D 人間大砲

L'uomo proiettile



毎晩サーカスで人間大砲として打ち上げられる「砲弾男」。火付け役の女イヴリンと恋に落ちた彼は、愛情と嫉妬について悩みを深めていく…。

同名の小説を自ら映画化。文明観や労働と愛のあり方をテーマに据え、映画へのオマージュを随所に配置した作品。「芸術としての映画」を発明したとされるジョルジュ・メリエス(1861-1938)に倣われている。引用されている映画作品は以下の通り。タルコフスキー『鏡』、エイゼンシュテイン『イワン雷帝』『アレクサンドル・ネフスキー』『ストライキ』、ウェルズ『審判』、ポンテコルヴォ『アルジュの戦い』、レジオ『コヤニスカッツィ/平衡を失った世界』、メリエス『トルコの死刑執行人』『マジック・ランタン』、ラング『メトロポリス』。

●1995年 ●イタリア ●カラー・86分 ●監督・脚本・撮影・編集/シルヴァーノ・アゴ스티 ●音楽/エンニオ・モリコーネ

F 天の高みへ

Nel più alto dei cieli



北イタリア田舎町の代表団がヴァチカンで法王を表敬訪問する。老若男女さまざまな社会的立場のメンバーは、一様に胸を高鳴らせ、謁見の間へと移動するためにエレベーターに乗り込むのだが…。人間の本性について想いを馳せざるをえない衝撃の問題作。終映後、ルイス・ブニュエルは「隠喩のようだが、おぼろげではない。はっきりしている」とつぶやいた。そのブニュエルの『皆殺しの天使』(1962年)と比較する人もいる問題作。

テーマ・内容ともあまりに過激だったため、公開前にフィルムを接収され、それから10年以上、目の目を見ることになかったいわづきの作品。

●1976年 ●イタリア ●カラー・83分 ●監督・脚本/シルヴァーノ・アゴ스티 ●音楽/ニコラ・ピオヴァーニ

『アゴ스티入門』トークショー 2/11(土)「快樂の園」+ドキュメンタリー上映後

ドーナツクラブ代表・FM802DJ 野村雅夫
野村雅夫:伊留学時代、アゴ스티の経営する映画館を偶然に訪問したことから交流を持ち、帰国後は日本でまったく知られていなかった彼の功績を体系的に紹介しようという決意。これまでに小説の邦訳を3冊出版し、全国各地で回顧映画祭を企画してきた。トークショーにはドーナツクラブの映画担当で、監督との面識もある柴田幹太も登壇。豊富なエピソードを交えながらの対談形式で、その特異な表現者としてのスタンスなど、アゴ스티の魅力をわかりやすく解説する。

□作品内容についてのお問合せ

大阪ドーナツクラブ
www.doughnutsclub.com
www.doughnutsclub.com
※全作品とも、監督から直接提供を受けたデジタル素材による上映となります。フィルムによる上映ではない点、ご了承くださいませ。

シルヴァーノ・アゴ스티 Silvano Agosti



作家、映画監督、詩人、俳優。1938年、プレーシャ生まれ、内乱状態に陥った第2次大戦末期の北イタリアで幼少期を過ごす。高校卒業後、崇拜していたチャップリンの生家を訪れるため、渡英。その後もヒッチハイクで地中海をぐるりと巡る旅を続けた後、ローマにたどり着き、国立映画学校に入学。首席で卒業後、奨学金でソ連へ。特に編集技術を学び、エイゼンシュテイン研究に没頭する。監督デビュー以降、表現者は経済的にも精神的にも独立して創作を行うべきだとの考えを徐々に突き詰めていく。現在は映画館を自ら経営。ローマ有数の名画座として知られ、映画ファンのみならず、映画人たちからも愛されている。

これまで製作に関与した映画の本数は劇映画・ドキュメンタリー合わせて50本余り。愛、労働、性、精神病、宗教、権力など、扱うテーマの幅の広さと独自のラディカルな表現から、驚異のインディペンデント監督として各国の映画祭で絶賛されており、アメリカやフランスでも再評価の機運が高まっている。

また、イタリア最高峰の文学賞であるストレーガ賞にも複数回ノミネートするなど、文学者としても成果を残している。邦訳に、ベストセラー小説『誰も幸せにならない1日3時間しか働かない国』(マガジンハウス)、異色のサスペンス『罪のそがた』(シーライトパブリッシング)、ローマの市井の人々を描いた92本の掌編集『見えないものたちの踊り』(シーライトパブリッシング)がある。

□上映スケジュール

2/4(土)	B 10:30		
2/5(日)	B 11:20	C 15:15	E 17:00
2/6(月)	B 11:20	C 15:15	E 17:00
2/8(水)	B 11:20	C 15:15	E 17:00
2/9(木)	B 11:20	C 15:15	E 17:00
2/10(金)	B 11:20	A 15:15	F 17:20
2/11(土)		A 15:15	F 21:15
2/12(日)		A 15:15	F 17:20
2/13(月)		A 15:15	F 17:20
2/15(水)		D 15:15	B 17:05
2/16(木)		D 15:15	B 17:05
2/17(金)		D 15:15	B 17:05